

市史編さんだより

市史編纂アンケート調査

市民アンケート結果まとめ

大きく変化した戦後の市民意識
 生活感覚は「中」から「上」へシフト
 よい思い出「济々餐の全国選抜野球優勝」

現代専門部会 岡村良昭

新熊本市史編纂委員会は、同市史・現代部門編纂の史料とするため、昨年六月、熊本市民を対象としたアンケートを行った。現代部会が担当している昭和二十年の終戦から現在にいたる市民生活の意識と姿を探ることをねらいとしたもので、その結果がまとまったので、ここにそのあらましを報告する。

戦後四十余年を経て、時代は昭和から平成へと大きく移り、二二世紀を展望しているいま、半世紀に近い私たち自身の歴史を振り返ることは、今日を生きて、明日を展望するうえで重要な意味をもつ。とりわけ、県都熊本市で、苦楽を共にしながら歩いてきた市民の意識がどのような変化をみせてきたかを、長い歴史のなかで位置づけて考えるうえで大きな参考となることは間違いないと思う。

アンケートは、年齢満三〇歳以上、満八〇歳以下(平成二年四月一日現在)で、熊本市在住歴二〇年以上の方

編集・発行

熊本市
 新熊本市史編纂
 委員会

熊本市手取本町1の1
 市史編纂事務局
 ☎328-2038



第30回選抜高等学校野球大会で優勝、九州に初めて紫紺の大優勝旗をもたらした活々樂々チームは、市民の熱狂的な歓迎を受けた。
 昭和33年4月12日
 熊本駅前広場で
 写真提供/熊本日日新聞社

目次

▽市民アンケート結果まとめ	1
▽熊本の産物帳について	4
▽小山城跡について	5
▽曲輪と町と在	7
▽縄文時代の熊本人	8
▽日誌抄	8
▽古閑惟満日記——古閑家文書紹介——	9
▽植木市の今昔	10
▽専門部会専門員の紹介	12
▽市史編纂協力員の設置	12
▽史料調査にご協力いただいた方々	12
▽編集後記	12

の中から、無作為に一、〇〇〇人を対象者に選んだ。これら対象者を居住地によって三三地区に分け、調査員が対象者の家庭を訪問して調査票を配布、後日、調査員が回収する留置法で行った。

アンケート項目は、大きく次の五部門に分けた。

- 1、暮らしに関する設問
 家庭の財物、買い物の際の交通機関、旅行する際の交通機関、余暇の過ごし方、映画・演劇・音楽会、購読誌・購読雑誌、暮らしと医療のかかわり、生活で苦労したこと、生活程度
- 2、政治・行政に関する設問
 支持政党、日米安保条約・自衛隊、生活にかかわる施設、住宅、教育文化施設
- 3、熊本市の将来像や天皇陛下のご巡幸の際の感想
- 4、回答者の属性
 性別、年齢、職業、家族数、住まいの形態、居住

地

5、熊本市民として戦後忘れられない出来事(自由記述)

右のうち、1、2、4、については、終戦直後、昭和三〇年前後、昭和四〇年前後、昭和五〇年前後、昭和六〇年前後の各時期に分けて同様の質問を行い、回答者の記憶に基づいて回答してもらった。

調査期間は、平成二年六月一四日から二二日までであったが、総数一、〇〇〇票のうち回収数八五五票(回収率八五・五%)、有効回答八二六票(八二・六%)となり、稀にみる高い回収率であった。対象者をはじめ関係の方々のご協力によるものである。

以上の調査の内容は、市史・現代部門の通史および史料として活用される。

次に、調査内容のなかから一部を紹介しよう。

生活感覚は「中」から「上」へ

〔生活程度〕

自分の生活程度を上、中、下のクラスのどれと感じていたか、の質問に、終戦直後から六〇年代までの各時期を思い出してもらったところ、年代によって大きく変化することがわかった。すなわち終戦直後は「中」が四九%、「下」が四四%でタケノコ生活の毎日。「食べることに必死であったことを裏書きしている。これが三〇年前後になると、「中」が五九%で、その分「下」が減り、苦勞したのは食費から衣料費に変わる。「もはや戦後ではない」と経済白書が述べて、戦後からの立ち直し宣言をしたのは昭和三十一年であった。

ついで三〇年代半ばの所得倍増政策から高度経済成長へと発展する四〇年前後の生活程度は、「中の中」が増加して三八%となり、「中」と「上」を合わせると実に七五%に達する。さらに一億総中流論が話題になる五〇

年前後は、「中」が七六%となり、これに「上」を加えると八五%と増加する。生活に苦勞したのは四〇年前後から教育費となり、五〇年前後になると新たに教養・娯楽・レジャー費が登場してくる。そして六〇年前後は「中」が横ばいに比べ「上」が増えてくる。しかし、所得格差は開く一方で、経済大国・生活小国といったくらしの現実には、このアンケート結果にも生々しく浮き彫りにされている。

時間とカネのかかる余暇利用へ

〔余暇の過ごし方〕

1、三〇年前後まで余暇・娯楽のトップであった「映画・演劇」の割合は五%を示していたが、テレビの普及とともに急速に低下し、六〇年前後になると一七%に下がっている。

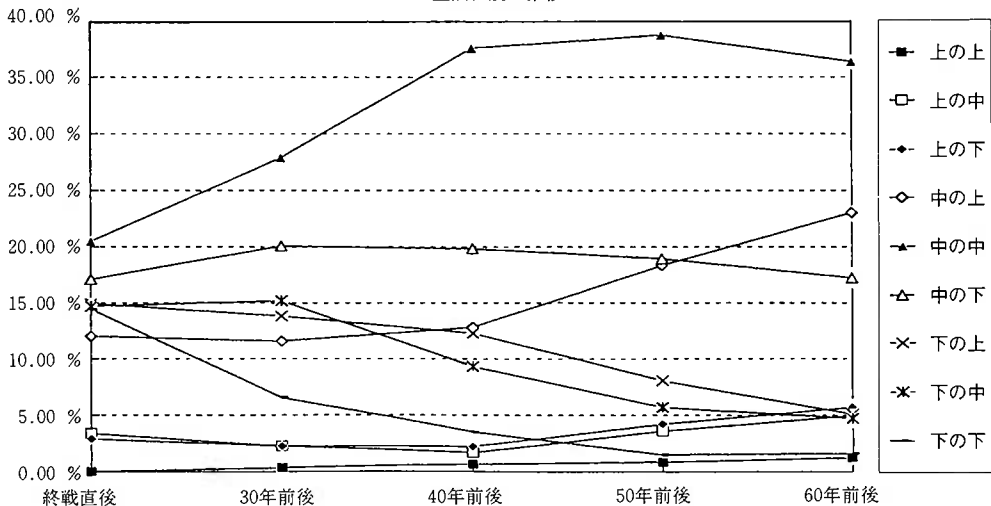
2、三〇年前後から目立って割合が高くなるのが「ドライブ」と「国内旅行」。この二つは六〇年前後には三〇%を超える。温泉も五〇年前後大きく伸びている。「読書」はほぼ横ばいながら一貫して高い割合にあり、余暇の過ごし方のなかで人気が高い。割合は低いが「ゴルフ」、「海外旅行」は四〇年前後を境に上昇をつけ、六〇年前後には一〇%近い人が回答している。余暇の過ごし方の内容は多様化している。殊に、終戦直後から四〇年前後までの「映画・演劇」など手近なものから、五〇年、六〇年にかけて時間とカネのかかる過ごし方に変わってきたことがわかる。

四〇年前後から満足派が増加

〔生活環境〕

周辺生活環境にたいする満足度については、終戦直後は満足派(満足していた、まあ満足していた、の合計)一

生活程度の推移



五%にたいし不満足派(不満足だった、やや不満足だった、の合計)が五二%で、不満足派が圧倒的に多い。

この傾向は三〇年前後も一八%対五三%とつづいて終戦直後の環境未整備状況を引きずっているが、四〇年前後になると満足派の割合が大きく高まって二七%となった。道路舗装や上下水道整備が少すずすんできたことと無関係ではない。五〇年前後になると満足派がさらに増えて三九%と急上昇したのと対比的に不満足派は逆に一一ポイント下げて四〇%となり、満足派・不満足派がほぼ同じ割合になった。これを境に満足派と不満足派の割合は逆転して六〇年前後には満足派五七%、不満足派二九%となる。

熊本市の上下水道の普及推移を市水道事業統計年報で見ると、昭和二〇年度五〇%、三〇年度五七%、四〇年度七九%、五〇年度八六%、六〇年度九二%となる。特に三〇年から四〇年の間の急速な普及があり、アンケートに表れた四〇年前後の満足派の増加の一面を裏付けている。

よい思い出の第三位は濟々餐の選抜優勝

〔熊本市民として戦後忘れられない出来事〕

アンケートの回答は「よい思い出」と「よくない思い出」に分けて自由に書いてもらう方法をとった。公的なことから、私的な出来事を含めて実にさまざまな記述があつて、市民一人ひとりがそれぞれに多様な思いをもちながら生活をしていることを物語る内容であつた。

記述の内容をデータとして厳密に集計、分析することは適當ではない。おおまかな傾向としてみると、記述総数七四三票のうち、「よい思い出」について記述があつたもの三四八票、「よくない思い出」について記述があつたもの三九五票となつている。

「よい思い出」のなかで圧倒的に多かったのは次の二

つ。

1、交通網の整備や交通機関の発達、上下水道の整備や河川改修など社会基盤の整備がすすみ、便利に、安心して暮らせるようになった。

2、市庁舎、交通センターなど優れた公共施設ができて誇らしく、暮らしにも潤いや生きがいが増えた。

この二つにつづいて目立ったものは

3、濟々餐の全国選抜野球大会優勝(三三年)

4、昭和天皇ご来熊、同皇太子のご成婚・ご来熊

5、熊本城の再建を含め、阿蘇、天草などの優れた観光資源

6、熊本国体(三五年)や躍進熊本大博覧会(三七年)など大きな催しものの開催

7、戦後奇跡的な復興を遂げ、安定した暮らしができるようになった。

8、素晴らしい自然環境

9、熊本出身スポーツ選手の世界的な活躍

10、中国・桂林市との友好都市締結など市の国際化

濟々餐の全国選抜野球大会優勝についての記述の多さには目を見張るばかり。その前年の三二年には七・二六大水害があり、六・二六大水害(二八年)の悪夢からやっと立ち直った矢先の大災害に市民は打ちひしがれていた

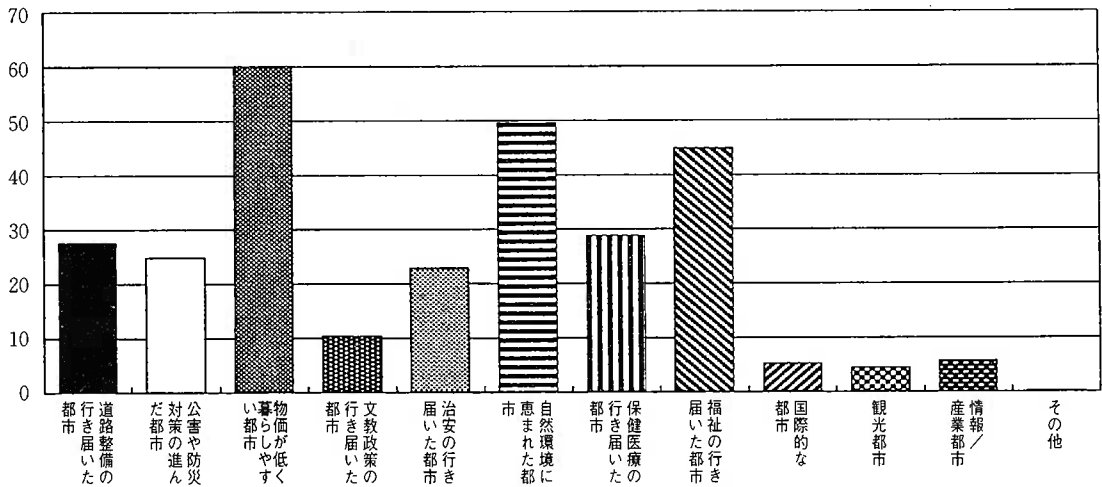
そんなときの大優勝がどんなに市民を奮立たせたせる出来事となつたか、このアンケート結果は教えてくれる。

また、皇室に畏敬の感情をもつ人の割合が多いといわれる熊本県民にとつて、昭和天皇のたびたびのご来県や皇太子のご結婚、ご来熊など、そのたびに「感激した」という回答が目立った。そして、その感情は、ご来県の回数が増すにつれて次第に「親しみ」に変わっていく。

一方の「よくない思い出」は1、大水害(二八年)2、大洋デパート火災(四八年)につづいて3、敗戦・引き揚げ・戦後の生活苦、を思い出す人々が多く、新しいとこ

ろで4、辛子レンコン中毒事件(五九年)となつている。殊

熊本市の将来像



に、二八年六・二六大水害はまるできのうの出来事のように生々しい記憶と自らの体験をもつ市民が多いだけに記述にも迫真性があるものが多い。

また、「敗戦・引き揚げ・生活苦」についての記述では「熊本市内の焼け野原を見たときの悲しかったこと」、「食糧不足を補うため焼け跡にカボチャを植えていたが、収穫期になると盗難にあい、半分はもっていかれた」、「あなたはよそもんな、と言われて食糧を分けてもらえなかったことが今でも忘れられない」など暗い過去の思い出としてつづられている。

市の将来像一位は

「物価が低く暮らしやすい都市」

〔熊本市に望む将来像〕

熊本市民は将来熊本市がどんな都市に発展することを望んでいるだろうか。この質問は熊本市がこの百年歩いてきた歴史の足跡と無関係ではありえない、とも思えるという意味で興味がある。回答者数七七七票のうちトップは「物価が低く暮らしやすい都市」(二六〇%)を選んでいる。ついで「自然環境に恵まれた都市」(五〇%)、第三位が「福祉の行き届いた都市」(四五%)。

以上三つの回答数合計は一、二〇一となり、全回答数(二三項目、一、二二四)の五四%にあたる。つまり市民の半数はこれら上位三項目のどれかを選んだことになる。

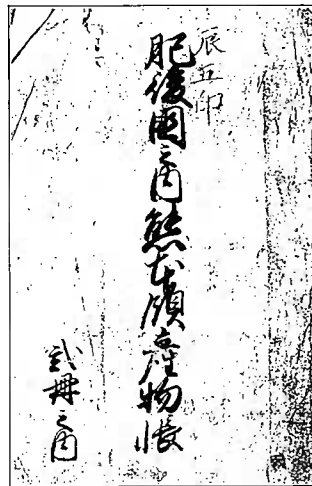
第二グループとしては、「保健医療の行き届いた都市」(二二八%)、「公害や防災対策のすんだ都市」(二二五%)とつづぐが、上位三項目の割合とは大きく開いている。また「文教政策の行き届いた都市」(一〇%)や「情報・産業都市」(六%)、「国際的な都市」(五%)、「観光都市」(五%)の順となり、その割合からみてもこれらの都市への展開を望む割合はさほど高くはないことを示している。

調査トピックスから

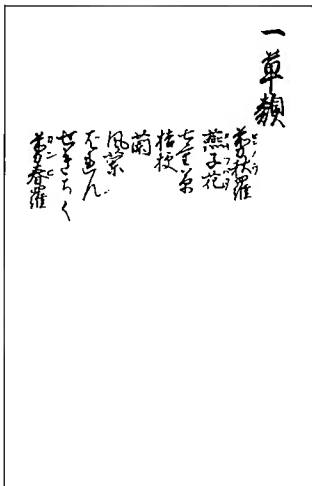
熊本の産物帳について

自然専門部会 浜田善利

熊本大学付属図書館に寄託されている永青文庫には、「肥後国之内熊本領産物帳」がある。これは「豊後国之



(1)



(2)

(1) 産物帳の表紙
(2) 産物帳 草類の第一ページ
〔永青文庫〕文書から

内熊本領産物帳」と対をなしている。産物帳とは、享保年間に丹羽正伯が徳川幕府の名において、全国の藩に指示を出して、各国の産物を細大漏らさず書き出させようとしたものである。幕府からの命であるから、各藩ではきわめて短期間であったにもかかわらず、当時の栽培植物および天産の動物、植物、鉱物を、指示された通りに書き上げて幕府に提出した。それゆえにこの産物帳は、江戸時代の日本の産物の貴重な記録となっている。

熊本藩では享保二〇年(一七三五)に、前記の二冊を提出している。そしてその控えが永青文庫に保存されている。そのうちの「肥後之國」の方の全内容をみると、穀類、菜類、菌類、瓜類、菜類、木類、草類、山人参、毘人参、竹類、魚類、貝類、がめ、かうず、海月、海草類、水前寺苔、菊池川苔、川茸、鳥類、獸類、虫類、蛇類、辺土之百姓喰用仕候品々、金以下の鉱物の項目が立てられている。

穀物には、わせ、なかくて、餅桶、野稻、大唐粟、餅粟、稗、黍、小麦、大麦、蕎麦、大豆、黒大豆、青大豆、あせ豆、十六寸豆、夏豆、八升豆、いんげん豆、豌豆、赤小豆、大角豆、白さ、け、黒さ、け、があり、その後に、胡麻、佳子、菜種子、いちび、しちとう、藺、木綿、藍、紅、茶、たばこ、麻、塩をあげてある。菜類には、菜、蕪、大根、茄子、芋、薯類にそれぞれ品種をあげ、牛蒡、萵苣、高苣、罌粟、胡蘿蔔、生姜、茗荷、款冬、葱、わけぎ、かりぎ、大葱、小葱、韭、大蒜、胡菜、むじんそう、ふうろう、番椒、刀豆、紫蘇、ほうれん草をあげて、その後に、蓼、よめ菜、芹、三葉芹、藜、独活、土筆、たびらこ、薺、蔴、蒲公英、かしう、紫蔴、蓮根、仏の座、防風、烏芋、零余子、五加、艾、川ちさを列挙して「山野川に生じ菜類に仕候」としている。

る。

菌類には、初茸から松露まで一八点。

瓜類には、甜瓜、漬瓜から瓢箪まで八点。

菓類とは、果樹のことで、梅、桃、柿、梨子、栗、蜜柑、さんかん、久年母、橙、枇杷、柚、杏、柘榴、棗、かぶす、ゆかう、銀杏、橘、仏手柑、椎、榧、樺、胡桃、山椒、葡萄、くわくわつか柚、覆盆子、けんほのなし、まるめら、楊梅、庭梅がある。

木類には、杉、松から始めて、計一五〇点がある。

草類には、剪秋羅、燕子花から始めて女青まで計四三

六点がある。

山人参、髭人参は、阿蘇の産。トチバニンジン。

竹類は、真竹、はらく、以下、八重葉笹まで二二点。

魚類には、泥鰌、鯉から川白魚まで三〇点と、鯛から

海老までの海産物が七二点ある。

貝類には、田螺から蛸まで淡水産の貝が六二点。

がめ、かうず、蟹には、「川筋井手筋に居申候」とある。

続けて海産の貝類などが五七点ある。

海月は、タイラギ。

海草類は、海雲、わかめ、以下、きはまで二二点。

水前寺苔は、「託麻郡江津川之内神水ト申所ニ生申候」とある。

スイゼンジノリである。

川茸、川苔は、阿蘇産。

鳥類は、七六二点。獣類は、二二二点。

虫類は、一三二五二点。蛇類は、一八二点。

辺土之百姓食用仕候品々は、大豆葉、小豆葉から、すみらまで五四点がある。

このような内容を詳しく検討すると、江戸時代の熊本の栽培品や天産物が判明する。

文献「享保・元文諸国産物帳集成第一三巻 豊後・肥後」科学書院（一九八九）

小山城跡について

中世専門部会 大田 幸博

〔はじめに〕熊本県民総合運動公園の南側背後と南東側に神園山（標高一八六・三 m）と小山山（標高一八九・六 m）が谷部を挟んで相対しており、両山とも中世城跡と伝えられている。『肥後国誌』や『古城考』は、前者を長嶺城とし後者を小山城と称しているが字名から見ると、小山城が「上ノ山」で長嶺城が「下ノ山」であり、距離的な事も考慮すると、一連の城跡との見方が出来る。今回、市史編纂の一環として小山山の測量を実施したので、その結果の一部を報告したい。

なお、小山一帯の歴史については、阿蘇品保夫氏の執筆によるものである。



小山城跡の実測作業

〔測量結果〕小山山の

山頂部分には東西方向に主軸方位をもつ尾根筋があり、これを基点に北西方向と南東方向に末端尾根筋の伸びがある。中世城跡としての遺構が残るのは、山頂部分と北西方向の末端尾根筋の二ヶ所で、南東方向の尾根筋については熊本市水道局の配水池となっている。

〔山頂部分〕尾根筋の長さ七二 m の範囲に確たる遺構が残っていない。三角点のある場所は

は城跡の主郭部分で「城床」という小名が残っており、長軸二七 m、短軸一四 m、面積三八〇㎡の平地となっている。（但し、西側半分は建設省マイクロ回線用の小山反射板が建っており、周囲はフェンスが張られている。）斜面部はいずれも明らかに削り落されている。

〔堀切①〕主郭の西下にあり、長さ八 m、掘底の下場幅は一・五―二・〇 m を測る。主郭の西端部と掘底中央部の比高差は約二 m である。

〔土塁①〕堀切①の西側に積まれた土塁で孤状の走行を示し長さ十六 m、上場幅二 m、土塁上面と掘底の比高差は〇・六 m を測る。

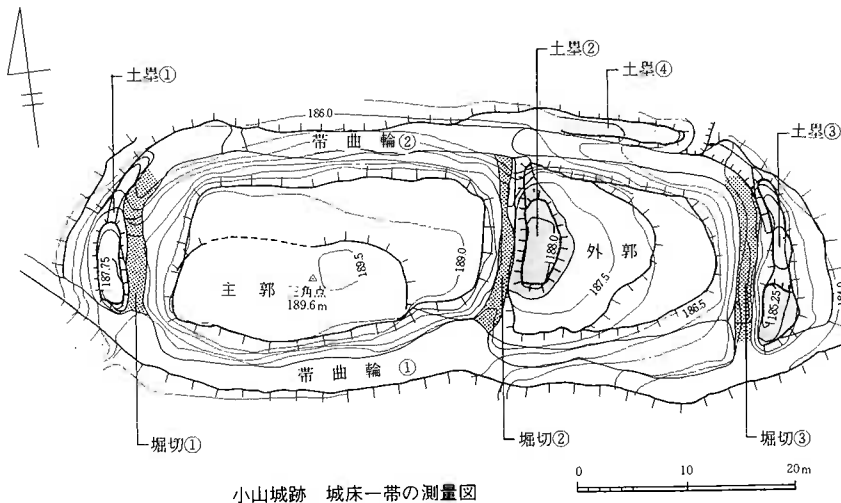
〔堀切②〕主郭の東側部分の尾根筋は緩く傾斜しているので、これを断切するための堀切である。長さ十六 m 分を確認出来る。掘底の下場幅は一 m で主郭の東端部との比高差は一・三 m である。

〔土塁②〕堀切②の東側の尾根筋に積まれた土塁で、やや三日月形の形状を呈する。崩壊が進行しているが、長さ十二 m、上場幅は南北両端で二 m、中央部で三 m を測る。土塁上面との比高差は東側尾根筋側で〇・一 m、堀切②の掘底とは〇・六五 m を測る。

〔外郭〕主郭と堀切②を挟んで相対する郭で、西縁に土塁②が積まれている。舌状形の平場で長軸一八・五 m、短軸は西端で五 m、東側寄りで一〇 m を測る。但し、平場の上面は西側から東側への緩傾斜地で、両端の比高差は一 m を示す。

〔堀切③〕外郭の東下にあり、長さ二二 m、掘底幅は一・五 m、外部東端部と掘底の比高差は一・七五 m を測る。

〔土塁③〕堀切③の東側に積まれた土塁で、土塁の上面は南側から北側への緩傾斜地となる。北端部は、かつて北西側へカーブを描いて、今よりもさらに延びていたものと思われる。



小山城跡 城床一帯の測量図

(帯曲輪①②)いずれも堀切①③の堀底と繋がっており、山頂部分の主郭と外郭の直下をいけば同心円状にくるりと巡る格好となる。幅一・五m〜三mで主郭や外郭との比高差は一・五m〜二m程である。

(土塁④) 帯曲輪②の東側部分に残る土塁状の地形で、長さ二〇m、上場幅二mを測る。この地形がもし土塁であるとするならば、帯曲輪②には空堀が埋没している

る事になる。

(北西側尾根筋) 地元ではこれまで小山城跡の中世城跡としての遺構は山頂の城床のみに限るとの解釈がなされてきたが、今回の調査で北西側尾根筋の直下にも帯曲輪状の遺構が残っている事や、山頂との間の尾根筋に堀切が存在している事が判明した。この箇所は測量については、後日実施する事になっている。

〔小結〕尾根筋のみに遺構を残す典型的な山城で、皆的な中世城跡であつたらうと思われる。

市史発刊の際には、隣接の神園山を含めた詳細な測量図面を掲載する事になっている。

〔歴史〕小山の地は、六箇庄の一部である。

同庄は託麻・益城郡の中で一円化せず、長講堂領として平安後末期以来存在していた。平安末の源平合戦を経て、鎌倉幕府の成立に当り、庄内の権利のうち平氏ゆかりの部分が没収されて、新たに本補地頭の権利が庄内に生じていたが、更に承久の乱後、残る部分が没収されて、新補地頭分として後の北条執権家(得宗家)分となった。

小山村もこの中に含まれていたとみられるが、建保四年「將軍家政所下文」(詫摩文書)は、源業政にこの地を新恩の地頭職の地として与えた。彼がどんな功を立てたか明らかでないが、軍功とすれば建保元年の和田合戦が考えられる。

この合戦は侍所別当の和田氏と北条氏の争いであり、六箇庄新補地頭北条氏の支配下で、業政が働いた可能性はある。

彼は小山村住人とされているので、本来小山村開発領主の系譜につながる人物かも知れないし、北条氏地頭代として入庄、居住するようになったものかも知れない。

この業政の権利が小山村の支配権として、早岐氏に継

承された。鎌倉時代の早岐氏は一族の内部でその相続については、対立抗争するところがあったが、正和二年に作製された「正心早岐置文案」(詫摩文書)は、領内の治安を維持し、殺生禁断地を定め、ばくちを禁止し、民百姓を憐むことなど、領主としての心得を定めている。

また、南北朝期の康永三年の「早岐武宇讓状案」(詫摩文書)にみられる「おやまのやしき六かしよ、ちんのまへのはらよりミニミやしき」という記録は、小山城跡南麓集落に残る「居屋敷」、「陣内」という地名と関係あるのではなからうか。

応永十六年の「肥後国六ヶ庄小山百姓重役注文」(詫摩文書)は、早岐氏支配下の所領と考えざるを得ないが、収取の対象となっている百姓たちの所在地に「なかえ」、「かきせ」、「ひらやま」、「なかやま」、「としま」などのみられる。

早岐氏の存在は菊池氏直轄領の在地領主として室町後期にもみられ、文明九年の「早岐和政願文」(藤崎宮文書)、文明十三年の「菊池万句」(宗氏文書)に「早岐山城守邦政」の名がみられるが、小山との関係は明らかでない。

ところが、永正二年の「肥後国諸侍連署起請文写」(阿蘇文書)には早岐氏の名は見当らず、代って「小山十郎三郎運貞」という名がみられることは注目されるが、同氏と早岐氏との関係は不明である。

この小山氏はその前々年肥前亡命の菊池能運が出田氏の招きで帰国し、隈本城に籠った時、立田氏と共に小山右京亮が馳せ参じたが、心替りして小山、立田とも在所に打掃ったという「菊池武運(能運)書状」(相良文書)の述べる飽田、詫摩郡の在地領主の一人であったことは明らかであり、戦国期の小山城やその周辺地域は小山氏支配下にあつたとみられるのである。

曲輪と町と在

近世専門部会 松本 寿三郎

熊本藩では住民の表現に御国中・御家中・町中・在中の四様の表現がみられる。まず御国中とは領内をさし郡方・町方を通じて奉行所の支配に属した。「御国中諸船大小不限、御郡間へ根帳有之候、熊本町も以来船主並積高・帆数・小舟・漁舟ともに年々帳面二書記し相違候様」(熊本藩町政史料一346)「御国中津口・陸口出入之商売荷物改方、去四月より改正被仰せ付け候」(302)などがある。

御家中とは家臣をさし、彼らは原則として武家屋敷(曲輪 くるわ)内に住んだ。曲輪は「肥後国誌草稿」にいう御府中小路であった。狭義に用いる場合には熊本城域をさしているようである。「御曲輪内にて鳥を指申間敷、御堀にて魚を取候儀、堅仕間敷旨御達」(一4)「曲輪内小路小路、今度道幅改被仰付候」(263)とある。曲輪内の処置は屋敷方奉行の所管であった。

町中は町奉行の支配に属した。熊本町については16懸86丁に総月行事1・別当39・丁頭86、他に町横目がいて町政にあたった。「町中之者末末二至迄御侍中へ慮外ヶ間敷体無之様可申付候」(58)と町人としての分限は守られねばならなかった。在中は御郡方の支配に属し、在中の百姓への御法度筋は「在中之常々可申論条」や「教諭書」で出され、自由に町に居住することは禁じられていた。町人の在中での商売も制限されていたし、また百姓の御家中への奉公も制限されていた。曲輪・町中・在中はそれぞれに支配系統を異にしている。その間にはほとんど交渉はなかつたが、非常の場合にはわずかな交渉があった。

それは火事と災害である。まず火事の場合、宝暦二年

現在町中十五懸りから千百五十五人内二百一十一人は意が出動したが、彼らは町奉行の手について主として町方の消火にあたり、例外として藤崎宮・神護寺には一懸りより二人計三十人、御花畑館には西古町・中古町・東古町・新坪井町から輪番で出動した(315)。一方、曲輪内の火事には飽田・託麻五手永から表のように二百五十人が動員された。

もう一つの関わりは坪井川の川浚えであった。農業用水路でもある坪井川の川浚えは宝永六年以前は隔年になされていたらしいが、宝永七年以後は毎年三月始め坪井村よりに願ひ出て、御用人・御目付・郡頭・郡奉行・郡

宝暦12年(1762)の曲輪内出火の節出夫

手 永	人 数	集 合 場 所	明 和 7 年
五町手永	50人	北 大 手 門 塀 際	時 習 館 東 桜 馬 場 ひろき
池田	50人	時 習 館 東 塀 際	
横手	50人	桜 馬 場 大 榎 ひろき	
本庄	50人	山 崎 長 岡 左 七 郎 屋 敷 塀 際	
田 迎	50人	御 殿 南 ひろき	
計	250人		

横目の見分のもと、総庄屋の指揮のもとでなされた。飽田郡の五町・池田・横手の三手永から六百人が出夫した。区域は寺原口の広さから石塘出切りまで、寺原口は五町手永、下流は池田・横手手永の籤取りで決められた。

川筋の竹木伐採は坪井・竹部村受である。坪井川は曲輪内を流れるが、川筋の家中屋敷は掃除方が見分した。屋敷方からの出方はなく、屋敷の崩壊箇所は当人の拝借願ひによつて修復する習わしであった。(「坪井川井岸川さらえ方一件」古閑

家文書)こうして川岸の家中屋敷は在中の手によって保全された。船場町・唐人町・小沢町は川筋の町が川浚えを受け持った。坪井川は流域の在中と町中によつて維持保全されたのである。

熊本城下町では曲輪内と町中・在中は明瞭に区分けられていたが、時として曲輪内の武士は町中・在中に依存していたのである。

坪井川曲輪内川筋の幅

- 一 寺原五手永 幅八間、深九尺
- 一 横手 幅七間、深八尺
- 一 池田 幅六間、深七尺
- 一 本庄 幅五間、深六尺
- 一 田迎 幅四間、深五尺
- 一 五町手 幅三間、深四尺
- 一 寺原五手永 幅八間、深九尺
- 一 横手 幅七間、深八尺
- 一 池田 幅六間、深七尺
- 一 本庄 幅五間、深六尺
- 一 田迎 幅四間、深五尺
- 一 五町手 幅三間、深四尺

坪井川 曲輪内の川幅と深さの記録

古閑家文書から

縄文時代の熊本人

原始・古代専門部会

富田 紘 一

大昔の人の顔がどんなものであったのか、人骨からの復元がよく知られている。日本の原始・古代においては造形資料として縄文時代の土偶や古墳時代の埴輪があるが、絵画資料は非常に少ない。その中では熊本を中心に分布している装飾古墳は特筆すべきものであろう。

ところで、縄文時代にも東日本にごく稀に土器に人物を描写したものがみられる。西日本においてはそのようなものはほとんど存在しないが、唯一の例外として熊本市弓削宮原遺跡出土の人物を線で描いた土器片が存在している。左に実物大の拓本を示したものがそれである。



人物像線描拓本(実大)

弓削宮原遺跡は白川の左岸、河が大きく蛇行して広い河岸段岸を形成している弓削町の弓削神社周辺一帯に広

がる遺跡である。地点によって、縄文前期・縄文後晩期・弥生・奈良・平安の各時代の遺跡の存在が確認されている。白川に面し、背後に託麻三山や託麻原の台地をひかえたこの河岸段岸は各時代を通して人々の生活に適していたのであろう。その中で、特に縄文後晩期の遺跡は規模も大きく注目される。分布調査以外の発掘は行われたことはないが、故上野辰男・光沢徳行氏らによって表面調査が続けられていた。

この遺跡では、通常の生活道具である土器や石器のほかに、第二の道具とよばれる精神や宗教をあらわす土偶なども多数発見されている。おそらく、遺跡の規模や出土遺物の密度からみて、白川流域の拠点集落の一つであったと考えられる。同様な遺跡は同じ白川の中流域に、上南部町・新南部町・上立田竹ノ後・龍田陣内にもみられ、縄文後晩期にこの地域が大変集落の密集した一帯であったことが推測される。

人物像を線描した土器片は、一八七二年四月九日、当時熊本高校の学生であった村上通恭君によって採集された資料である。彼はその後、熊本大学で考古学を専攻し、広島大学の大学院に進み、現在研究生として活躍している。

資料は、深鉢形土器第Ⅱ類とよばれる土器の口縁部の小破片、縦六、五センチ、横が三、四センチ程である。破片があまりにも小さいため、土器の形式は判然としないが縄文後晩期の鳥井原式または御領式に属するものと思われる。おそらく、口径三〇センチ以上、器高は三五センチ程度の土器であったと推測できる。

焼き上がりの色は茶褐色をなし、焼成は良好で、胎土もよく精選されているものである。器面は表裏ともよく研磨されており、その表面に細い線で描いた人物がみられる。破片のため、人物像は一部が残存するのみで体部のほとんどを欠くが、幸いなことに顔面の大部分が残っている。その他の部分は、右側の腕を上にあげている一



平成二年

1・5	近代史料調査(新聞史料)
1・8	現代史料調査(新聞史料)
1・9	第十三回部会長会議(今後の史料調査・市史研究誌について)
1・12	現代史料調査(新聞史料)
1・14	原始・古代古墳調査(天福寺裏山古墳)
1・18	近世史料調査(聖徳寺文書)
1・19	現代史料調査(新聞史料)
1・28	第十回現代専門部会
2・3	原始・古代古墳調査(天福寺裏山古墳)
2・3	近世史料調査(乃美家文書)
2・17	中世文化財調査
2・20	第二回民俗・文化財専門部会
2・24	近代史料調査(古閑家文書)
2・25	中世文化財調査
2・25	中世史料調査(乃美家文書)
2・28	近代史料調査(古閑家文書)
3・3	中世文化財調査
3・3	現代聞き取り調査(初代市民病院院長北岡正雄氏夫人郁子氏外5名)
3・5	原始・古代遺跡調査(神岡山古代瓦窯跡)
3・7	第十一回近代専門部会
3・8	第二回自然専門部会
3・9	編集委員他都市調査(甲府市・東京都)
3・14	中世文化財調査
3・17	中世史料調査(乃美家文書)
3・18	第十四回部会長会議(現年度事業の実施状況・新年度事業計画について)
3・20	原始・古代史料調査(奈良国立文化財研究所・奈良県立橿原考古学研究所)
3・22	第八回近世専門部会
3・25	

部がみられるのみである。

人物の顔は、ほぼ正円形をなしており、直径約三寸、2〜3本の線を重ねて輪郭を作っている。特別に頭髮らしい表現はない。

顔面上部には両端が上がるように目または眉の表現がある。右側は3本の線で、左側は4本の線を重ねている。これが目であるのか眉であるのかは問題である。複数の線で表現しているため眉のようにみえる。しかし、九州出土の土偶の例でも眉と目どちらとも区別できないものが多い点からしてこの場合も、土偶と同様にどちらともいい難い。

顔面中央には三角形に鼻を表現している。土偶の場合で見ると、九州では三五〇例ほどの出土の中で鼻を表現しているのは五例にすぎない。それからみると、この線描の人物像はより写真にちいかいともいえる。

顔面下部には口を円で表現している。その直径は約五ミリで、ほぼ正円形をなしているところから大きく口をあけて何かを叫んでいるようにもみえる。しかし、土偶の例でも口を円形の押点で表現しており、そのような動作を表したのではないだろう。

右側の上に挙げた腕は三本の線で表現しており、細い腕である。或いは破損部分にも線があり、もっと太い腕になる可能性もある。

全体にみるとはなはだ土偶の顔面表現にちいかい線描画といえる。土器自体が小さな破片であり、この人物像以外に土器のような表現があったのかは知る由もないが、周囲の情景が表現されていたものか、複数の人物が描かれていたものか、残念でもある。

このような西日本に唯一ともいえる絵画資料がどうして熊本市弓削宮原遺跡で出土したのか、その背景は不明としかいえない。縄文後晩期の中九州では土偶をはじめ東日本の文化がどっと波及した時期である。この資料もその中の一つであることだけは確かであろう。

古閑惟満日記

——古閑家文書紹介——

近代専門部会 前田 信孝

古閑孝氏(蓮台寺町)の御高配により、一昨年五月一日同家所蔵文書調査の機会を得た。同家の近世文書についてはすでに知られていたが、近代関係の史料については初めてである。いままお整理を続行中であるが、最終的には約二、〇〇〇点ほどになると予想される。まだ内容について検討を加える段階にないが、瞥見の一端を紹介しておく。

注目されるひとつに明治期の「古閑惟満日記」がある。日記という記録の性格上私的な記事が多いが、学校の創設、地租改正、西南戦争など歴史的な事件にかかわる具体的な記事も含まれている点興味深い。



古閑家日記

明治初期〜大正後期

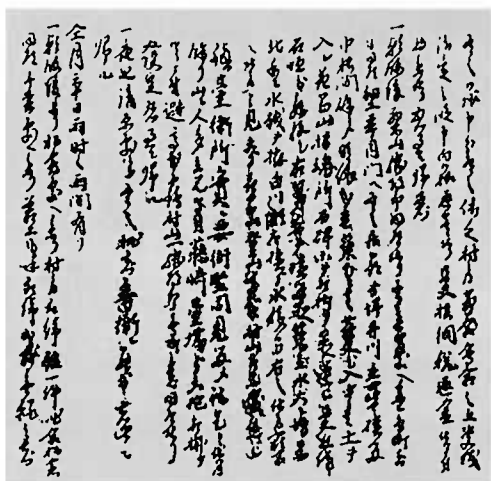
例えば、(明治七年 一〇月二八日)

「一七ツ過より宮崎所へ参り小学講開講ニ付場所并居家建方申談、所柄之儀は市平受持地方新平北手ニ治定、居屋は北岡宮能場御さじき風倒レ有之候分壹貫五百目ニ而拜領願決シ」云々と小学校設立の動きがうかがえるが、また、(明治八年四月四日)「一早期用掛参り親父様面会、明日より

3・27	第十回原始・古代専門部会
3・27	編集委員他都市調査(浦和市・東京都)
3・29	第十一回現代専門部会
4・5	第三回民俗・文化財専門部会
4・11	第三回自然専門部会
4・13	第十二回近代専門部会
4・16	第十一回原始・古代専門部会
4・17	現代史料調査(アンケート調査内容検討)
4・21	第十一回中世専門部会
4・23	第九回近代専門部会
5・1	第十五回部会長会議(新年度事業計画について)
5・8	専門部会専門員委嘱状交付式(追加)
5・10	近代史料調査(新聞史料)
5・19	第六回新熊本市史編纂委員会(旧年度事業報告・本年度事業計画について)
5・20	第四回民俗・文化財専門部会
5・24	近世史料調査(福島県立博物館・会津若松市立会津図書館)
5・28	近世史料調査(永青文庫絵図)
5・29	現代史料調査
6・1	第十二回中世専門部会
6・6	近・現代史料 新聞縮刷版製作委託契約締結
6・8	第五回民俗・文化財専門部会
6・12	第十二回原始・古代専門部会
6・14	第四回自然専門部会
6・16	現代 アンケート調査員説明会
6・18	中世文化財本調査(川尻地区)
6・20	第十三回現代専門部会
6・21	中世城跡実測調査(小山城)
6・24	近世史料調査(三浦家史料)
6・25	現代 アンケート調査用紙回収
6・28	中世文化財本調査
	中世城跡実測調査(小山城)
	第十六回部会長会議(各専門部会調査実施状況)

地租改正発開ニ付諸調方頼出」と地租改正調査開始の期日を示している。

西南戦争に際しては、(明治一〇年三月三日)「一昼比村章太郎鉛壳拂具候様談合仕候得共、賊用物ニは相



花岡山からの戦場景観記録

違無之事ニ付所持仕候得共手元遣用込ニ而拂出候分無之断ル」と官側に立ち、しかし「一、夕七ツ過未藤直圓と申賊参り鉛所持之由脇方より伝承仕り大棒之由壳拂具候様及脅迫、親父様ニも申談なく、鉛大棒百五斤代拾円半ニ而壳渡、未藤より鉛荷手を履参り兩人日暮未藤連越候壹人を見候処可憎章太郎罷越外志名は不見留、右之未藤罷越候も章太郎より之所意也、先即は鉛を所望ニ来壳拂候品無之申聞候尻、何共立腹向刃度一ト先打立候得共前後を考見合」と、薩軍に鉛壳却を強要されて立腹しているが、一方上田休ら川尻鎮無隊の動きに対しては、(明治一〇年三月二七日)「諸方ニ鎮撫と唱候は種々段等有り、戦場ニ出テ且ハ米金を貧り悪人と見極候ハ、人命を取、同勢を御敷唱、上田外二候ハ、重疊探偵仕候事ニ付、此変事ニ付士族ノ身ニ而潜候事迄ニ而は相済間敷、何様士族一統上田手人民保護ニ加り候方ト進ニ合ヒ新父様よりも在之都合ニ候ハ、加り候モ可然御申聞ニ付加ニ決ヌ」と士族の微妙な立場を示している。

植木市の今昔

民俗・文化財専門部会長

鈴木 喬

熊本の春の風物詩は「植木市」である。全国各地でも社寺の縁日や春の彼岸の頃などに開かれるが、熊本のそれは大規模なことでも歴史的な古さにおいても著名である。熊本では昔から、戦国時代の隈本城主城親賢を植木

市の開祖と崇めており、市のはじまる前には親賢の墓のある鳥崎の岳林寺に業者が集って、墓前祭を行っている。親賢がなくなつたのが天正九年(一五八一)であるから、少くとも四百数十年昔のことである。これについては「古今肥後見聞雜記(寺本直廉覚書)の中に、「熊本市日ノ初り」として次の説明がある。城越前守古城ニ在し比子息之慰ニ成候儀、何ぞ珍ら敷儀を致候様ニと新町え申付られ候へば、其節友枝杯が先祖新町壹丁目ニ市を立候而慰ニ出し候由、其時池上村

6・29	市史研究くまもと 市史編纂だよりの発行について)
6・30	近世史料調査(永青文庫絵図撮影)
7・6	第十回近世専門部会
7・12	中世城跡調査(小山城)
7・13	中世史料調査(太宰府天満宮文化研究所・福岡県立柳川古文書館)
7・16	第十三回近代専門部会
7・18	第六回民俗・文化財専門部会
7・23	第五回自然専門部会
7・23	近世史料調査(永青文庫文書)
7・30	近世史料調査(新聞史料)
8・3	近世史料調査(泉立図書館絵図)
8・1	近世史料調査(陸上自衛隊北熊本駐屯地)
8・6	現代史料調査(永青文庫文書)
8・16	現代史料調査(新聞史料)
8・17	民俗・文化財聞き取り調査(市託麻地域関係者9名)
8・20	近世史料調査(県立図書館絵図)
8・21	近世史料調査(永青文庫文書)
8・29	近代史料調査(南部家史料)
8・31	現代 アンケート調査報告(古書原稿受領)
9・1	現代聞き取り調査(元県防犯協会事務局長増田民男氏外3名)
9・3	近世史料調査(永青文庫文書)
9・4	第六回自然専門部会
9・5	第十四回近代専門部会
9・7	市史編纂事業他都市調査(新潟市・甲府市)
9・12	第十三回原始・古代専門部会
9・17	第十四回現代専門部会
9・22	第十一回近世専門部会
9・26	第七回民俗・文化財専門部会
9・27	近世史料調査(永青文庫絵図撮影)
9・28	編纂委員他都市調査(京都市・大阪市・彦根市)
10・3	現代 アンケート調査報告(古書受領)
10・8	原始・古代遺跡調査(上高橋高田・池辺寺)
10・8	近世史料調査(県立図書館絵図)

専門部会専門員の紹介

新たに次の方々を平成二年五月一日付で委嘱しました。

(敬称略)

▼原始・古代専門部会

佐藤 伸 二(八代工業高等学校教授)

▼現代専門部会

坂口 勝彦(熊本日日新聞論説副委員長)

市史編纂協力員の設置

史(資料)の調査・収集について、情報の提供や助言等のご協力をいただくために、次の方々を平成二年十月二十六日付で委嘱しました。

(敬称略)

- 河上 良輝 黒髪四一七一一九
- 堀江 満 黒髪三一四一四一
- 飛鷹 俊夫 松尾町上松尾四二二一
- 清水 幸男 城山下代町七五二一〇
- 西田 牧二 島町一〇二八
- 松本 芳之 川尻町九二八
- 鳥山 正治 健軍三一五一一一
- 西村 政朝 神水本町一六八
- 宮田 盛雄 龍田町弓削九八七
- 中村 大喜 龍田町上立田一九二七
- 工藤 德行 御領町二三七
- 野田 哲也 小山町三六五
- 園田 信義 御幸笹田町二四
- 柚原 正彦 田迎町出仲間五〇八
- 大塚 久 室園町一八八
- 村上 勝哉 八景水谷一〇二〇一三二
- 吉村 伸次郎 沼山津三一〇一九八
- 中山 榮壽 秋津二一一一三六
- 渡邊 敏則 水前寺三一四〇一三三

坂本 昌夫

国府二一六七四

淵上 久孝

島崎六一七三七

水上 千歳

花園五一八一二〇

史料調査に

ご協力いただいた方々

(自平成二年一月至平成二年十二月)

(敬称略)

- 満水貞徳(小山町)、野田哲也(小山町)、丸野熊一(小山町)、東光彦(御嶺町)、松本龍雄(龍田町上立田)、荒瀬昭(新屋敷二丁目)、桜間善助(春日五丁目)、太田黒嘉彦(十禅寺町)、上野信一(松尾町上松尾)、本田隆道(十禅寺町)、三浦節夫(渡鹿五丁目)、渡辺節子(新町三丁目)、荒木はるみ(桜町五丁目)、山野亭亮(玉東町)、福島徹雄(渡鹿五丁目)、打出綾子(内坪井町)、増田民男(花立三丁目)、野口三男(池田三丁目)、柴田利昌(清水本町)、岩田憲二(尾ノ上二丁目)、北岡郁子(九品寺一丁目)、渡辺宗尚(健軍四丁目)、野尻トミエ(健軍町)、杉本文子(湖東一丁目)、芹川ヨシノ(花立一丁目)、田中カズ子(湖東二丁目)、工藤定(石原町)、榊田正則(鹿掃瀬町)、田中馬三信(弓削町)、林田時久(吉原町)、永野輝男(上南部町)、南部博之(上南部町)、榊田重治(渡掃瀬町)、福田淳二(弓削町)
- 奈良国立文化財研究所、奈良県立橿原考古学研究所、熊本県文化課、力合小学校、(財)永青文庫、(財)三池郷土館、文化財保存計画協会、熊本大学附属図書館、熊本県立図書館、玉名市市史編纂室、玉東町教育委員会、田迎神社、国立国会図書館、国立公文書館、熊本博物館、市立図書館

史料の提供について...

...お願い!!

市史の編さんにおいては、文書、記録、遺物、遺跡、伝承的習俗など有形無形の史料を収集することが、大切な仕事となります。

地域における人々の生活が、その地域社会の歴史であるように、郷土の先人の生きかたを知る手掛りとなるものは、すべて史料となります。町や村、寺社に伝えられたもの、個人の家に伝えられたもの——手記、日記、手紙、写真、地図、古文書など、手書き、印刷物、体裁は問いません。情報をお寄せください。

問い合わせ・連絡先は

熊本市手取本町一番一号

熊本市役所市史編纂事務局

電話 三三二一〇三八

編集後記

市史編さん事業も本格的に取り組んで三年目となり、各専門部会では、史(資料)の調査・収集が精力的に続けられています。

今号は、これらの調査の中からトピックスをお届けしますが、このうち、市民アンケート調査は、多くの市民の皆様のご協力できあがったもので、戦後四十余年間の市民生活と意識の変化などが、克明に調査されています。

今後、皆様からのご意見や情報をいただき、事業に生かしてまいります。ご愛読いただければ幸いです。

(事務局)